

全体戦略ワーキンググループ・ジャパンサーチワーキンググループ合同会合
(第1回)

日時：令和2年10月29日(木) 11時00分～12時40分

場所：中央合同庁舎4号館4階 共用第2特別会議室

- 議事：(1) ワーキンググループの設置について
(2) ジャパンサーチ正式版公開後の状況について
(3) 産学官フォーラム(第4回)について
(4) ワーキンググループの進め方について
(5) その他

一、開会

○事務局(高津参事官補佐) それでは、ただいまからデジタルアーカイブ全体戦略ワーキンググループ・ジャパンサーチワーキンググループの第1回合同会合を開催させていただきます。

本日は、御多用の中、御参加いただきまして、ありがとうございます。

それでは、議事に入る前に配付資料の確認をさせていただきます。

まず、本編資料といたしまして、

資料1 デジタルアーカイブ全体戦略ワーキンググループ及びジャパンサーチワーキンググループの開催について

資料2 ジャパンサーチ正式版公開後の状況報告

別添① Googleアナリティクスレポート

別添② ジャパンサーチの連携候補

資料3 産学官フォーラム(第4回)について

別添① 産学官フォーラムアンケート集計結果

資料4 デジタルアーカイブに関するワーキンググループの進め方について(案)
になっております。

なお、別添資料につきましては、机上配付とさせていただきます。

参考資料といたしまして、設置紙を2点。

それから、3か年報告書の本文を添付してございます。

過不足ございましたら、事務局までお声がけいただければと思います。

それから、本日の出席者につきましてはお手元の名簿のとおりでございますが、赤字の方がリモート参加となっております。また、渡邊先生と北本先生が、急遽リモート参加に変更になってございます。

リモート参加の方がいらっしゃるのと、本日、座席指定をしておりませんので、御発言される際には、お名前を名乗って発言いただきますと助かります。よろしくお願いいたします。

ます。

そうしましたら、今回は新体制で1回目の合同ワーキンググループになりますので、冒頭、当方の田淵参事官のほうから御挨拶させていただきたいと思います。

○田淵参事官 皆様、本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

デジタルアーカイブ政策は、コロナ禍以前から重要な政策の柱であったわけですが、コロナを受けて、遠隔で教育、研究、各種イベントの開催など、様々な活動が行われるようになり、その実務的な重要性もさらに高まっているところかと考えます。

政府全体としてのデジタル化、デジタルトランスフォーメーションは重要な政策課題と位置づけられておりまして、デジタルアーカイブがその一翼をどのような形で担うのか。デジタルアーカイブ政策を進める上で、残っている課題は難しいものも多いわけですが、議論を進化させるために、推進委員会、実務者検討委員会という検討体制で3年間検討してきた枠組みを、さらに3年間延長した上で、有志会合として開いていた、この集まりを、正式なワーキングとして今回より位置づけております。皆様には、ぜひ活発な御議論、御意見をいただけたら幸いです。

以上、簡単ではございますが、事務局よりの挨拶とさせていただきます。

○事務局（高津参事官補佐） そうしましたら、ここから先の進行につきましては、高野先生のほうにお任せしたいと思います。よろしく願いいたします。

一、 議事

○高野座長 それでは、議題に入っていきたいと思います。今日、4つ挙がっていますが、一番の中心は（4）のワーキンググループの進め方というところで議論を深めたいと考えております。ですが、その前に、最近の状況について、いろいろな方から報告を受けながら（4）の議論につなげていければと思います。

今日のこの回は、ワーキングというものを設置するに当たって、初期値としては、これまでの実務者検討委員会を中心にやっつけていこう。それへ、必要に応じていろいろなメンバーを招聘しながら議論を深めていくという形を提案し、認められました。追加メンバーの第1号として、東大の大向さんをお迎えしています。ワーキングの議論にぜひ加わっていただきたいと考えています。一言お願いします。

○大向構成員 東京大学の大向と申します。今回から参加させていただきます。どうぞよろしく申し上げます。

私のバックグラウンドとして、以前は学術情報、論文や本を対象とするデータベース作りをやってきたのですが、今は東大に移りまして、文化庁の事業では、メディア芸術データベースという事業がありますけれども、そちらのシステム等にも関わっております。データを作る側、また集めて提供する側と、両方体験してきましたので、そういった経験を含めて貢献できればと考えております。

どうぞよろしくお願ひいたします。

○高野座長 大向さんは、前職のNIIではCiNiiの論文検索というものを手がけておられて、日本の学術系のインフラでお世話になっていない人はいないという方です。

それでは、議論に入りたいと思います。

まず、事務局から説明をお願いします。

(1) ワーキンググループの設置について

○事務局（高津参事官補佐） それでは、まず資料1について御説明申し上げます。

8月19日に開催されましたデジタルアーカイブジャパン推進委員会にて御承認いただきました「実務者検討委員会の運営について」の2項に基づきまして、ワーキンググループを2つ開催することを想定してございます。「実務者検討委員会の運営について」は、参考資料2として添付してございます。

資料1の1ポツですけれども、まず、全体戦略WGのほうですが、3か年報告書にも記載がありますとおり、デジタルアーカイブは、将来の知的活動を支える基盤的役割を持っているとされております。デジタル技術の進歩等によりまして社会基盤そのものが大きく変容した中で、フィジカルのデジタル化あるいはデジタルのフィジカル化、この双方向の利活用を考える必要があるとされております。

また、近年の大規模な災害の発生や新型コロナの影響などで、社会情勢の変化あるいは行動変容に対して、遠隔での様々な活動を可能とするデジタルアーカイブの構築、それからデジタル技術を用いてコンテンツを利活用できる環境を整備することの重要性が高まる中で、これらの変化に対応するデジタルアーカイブ推進の課題について検討することと記載してございます。

次に、ジャパンサーチWGのほうですが、ジャパンサーチにつきましては、統合ポータルであると同時に、日本社会全体のデジタルトランスフォーメーションを推進し、デジタルコンテンツの新しい利活用環境を提供するプラットフォームでもあるので、デジタルアーカイブをつなぎ、国レベルでの知的インフラとして機能するジャパンサーチを今後長期にわたって維持していくための課題について検討することと記載してあります。

2ポツ以降は、WGの細かい運営について規定しているところでございます。

別紙としまして、委員名簿をおつけしてあります。実務者検討委員会の皆様と、先ほど御紹介のありました大向先生に御就任していただいているところでございます。

資料1は以上になります。

○高野座長 どうもありがとうございました。

ただいまの御説明について質問、御意見等ございましたら、お願ひいたします。よろしいでしょうか。

2つのワーキングに分けて、自分は余り関係ないなという話題には、無理に参加いただかなくてもよいという形で、どちらに参加いただくことも可能という運用を考えております。

す。よろしいでしょうか。

(2) ジャパンサーチ正式版公開後の状況について

それでは、議題(2)「ジャパンサーチ正式版公開後の状況について」ということです。説明は、国立国会図書館からお願いいたします。

○徳原室長 国立国会図書館、徳原でございます。

資料2に沿って御説明させていただきます。

1枚おめくりいただきまして、資料2枚目になります。まず、ジャパンサーチ正式版の機能につきまして、まとめております。赤い星印のところを正式版を公開した8月25日から新機能として提供開始しているものになってございます。

既存の機能の紹介は省略いたしまして、簡単に新機能についてだけ説明させていただきます。

まず、利活用機能のAPIのところにあります星印についてです。こちらは、APIの一つ、利活用データを用いたSPARQL Endpointを用いて、それぞれのコンテンツの検索結果詳細画面に、関連するコンテンツとして同じ作者や同じ時代の他のコンテンツを自動表示させており、ジャパンサーチで検索した結果から、さらにほかのものに飛べるようになったということで、ジャパンサーチ内の回遊を促すことが始まっております。

あと、マイノートは誰でもアカウントなしで利用できるものになっておりますが、こちらにつきましては、正式版で機能を拡張しまして、ギャラリーと同じレベルの複雑なレイアウトのウェブページが作成可能となっております。

プロジェクトとワークスペースは、次のページで紹介します。

今後の開発予定としましては、一般ユーザーがマイノートと同様にテーマ別検索式を作成できるマイサーチという機能の追加を想定しております。また、地図やタイムラインを用いた検索及び検索結果の表示機能といった機能の追加も考えております。あと、統計機能の改善についても想定しております。現在は、暫定的なものとして、それぞれアクセスがあったコンテンツの件数を管理画面で取得可能にしているのですが、データベース単位ですとか、自分で調べたい範囲で簡単に分かるようなものを御用意できるよう、今、検討を進めております。

続きまして、3ページ目に参ります。

新機能の目玉の2つになるのですが、まず、右側のワークスペース機能から紹介します。こちらは、URLとパスワードを知っている人であれば誰でもアクセスできまして、複数人でマイノートやギャラリーを同時に編集できるページとなっております。成果物は、連携機関がジャパンサーチ上で公開できますし、ウェブパーツ機能でエクスポートして、御自分の好きなサイトに貼り付けることもできるようになっております。

あと、左側のプロジェクト機能についてです。こちらは、任意のメンバーで構成される組織として、そのプロジェクトの上では、ジャパンサーチ上で連携機関ができる作業が一

通りできます。データベースの登録・公開、ギャラリーや、右側のワークスペースページの作成等といったことが可能です。プロジェクトの成果物は、ジャパンサーチ上で一般公開することも、また関係者限りでメンバーだけで共有することも可能です。ただし、プロジェクトのデータについては、ジャパンサーチの一般的な横断検索や一覧表示の対象外という形になっております。

1 ページおめぐりいただきまして、利活用についてです。プロジェクトやワークスペースといった機能は、利活用拡大のためということで用意しております。

例えば、教育分野におきましては、既に、初等中等教育のキュレーション授業で活用いただいております。こちらは、本実務者検討委員会構成員の渡邊先生の研究室の大井さんが既に開始してございまして、こちらのURL等から、実際どういう活用をされているか確認していただくことができます。

学術・研究の場合は、大学の授業・ゼミの学習ツールのほか、デジタルアーカイブのコンテンツと研究成果の結び付けを可能とする共同研究のツールとしても使っていただけないかと考えております。既に何人かの先生にお声がけをしており、こちらでも実験的に始めているところです。

また、地域活性化におきましては、地域課題の解決のため、ジャパンサーチにある地域情報をまとめて発信するためのツールとしても活用できると考えております。こちらも、既にここに記載しておりますイベントでの活用が決まっております。

その他、様々なイベント等でも活用いただきまして、またそのイベントから新しい利活用アイデアをいただきたいということも考えております。

そこで、一番下の提案になるのですが、連携機関に属さないユーザーの方にも、プロジェクト・ワークスペース機能を利用いただくようにするため、実務者検討委員会という組織をジャパンサーチ上に登録しまして、その下に利用事例ごとにプロジェクトを作成してアカウントを払い出すことにしたいと考えております。具体的には、連携機関に属さないユーザーの方から利用希望があった場合に、こちらの実務者検討委員会のメンバーにメールでお諮りしまして、了承を得た上で、国立国会図書館のほうでプロジェクトを作成、アカウントを発行するといった流れを考えております。

続きまして、めぐっていただきまして、正式版公開以降のアクセス状況の変化についてでございます。この5ページ目には、試験版のときからと比較する形で正式版の状況を書いてございます。詳細については、机上配付としております資料2別添①を御確認いただければと思います。全体傾向として、ページビューでは4.4倍、ユーザーでは約3倍の増加傾向となっております。

めぐっていただきまして、こちら引き続きアクセス状況を報告しております。セッション時間も伸びていたり、直帰率は数字が低ければ低いほどいいわけですが、ちょっと下がっています。

海外からのアクセスも増えておりますが、これはジャパンサーチの正式公開イベントを9月に行うに当たって、その広報として様々な海外の日本研究機関のメーリングリスト等

に投げさせていただいた効果が出てきているのではないかなと思っております。

参照元につきましては、左側のほうですが、正式版では、ツイッターとかフェイスブック等、SNSからのアクセスが増加しているのが分かります。

続きまして、7ページに参ります。フィードバックの内容です。こちらは、正式版公開後にお問合わせフォームから寄せられたもののほか、産学官フォーラムでのアンケートやメール、また連携機関からのやり取りの中で直接寄せられた御意見等を入れております。システムのソースや設計に関して一般公開してほしいといった内容ですとか、英語版のUIはあるがもっと充実させてほしいなど、特にメタデータの多言語化対応といったことの要望が複数寄せられております。

ジャパンサーチのシステム的には、裏側で自動でローマ字変換したり、英語で検索しようとしたものを日本語で自動翻訳して検索したりといったことができるようになっているのですが、まだまだメタデータそのものへの多言語化といった要望が見られます。

あと、ジャパンサーチ側でデータを変換・マッピングした情報の連携機関への還元といった御要望もあったのですが、これは実は、正式版公開時に既に掲載済みとなっております。また、広報の強化、マニュアルの充実といったことの要望が挙がっております。さらに連携機関の方からは、つなぎ役と所蔵機関の表示の仕方について検討いただきたいというお声もいただいております。

ユーザーアンケートを11月前半に実施予定とあるのですが、もしかしたら今週末あたりから実施可能かなと思っているところです。

その他のお問合わせフォームからの問合せといたしましては、出版とか放送目的でのコンテンツ利用に関する問合せが大変増えております。有名な番組からも利用したいといった御意見もいただいております。活用が割と広がってきているのかなという印象を持っております。

最後に、連携状況についてです。正式版公開時、8月25日以降から追加になったところは、赤い網かけになっているところです。国立国会図書館サーチ経由で公共・大学図書館のデータベース及び、人間文化研究機構のnihuINT経由のデータベースが増えておりますし、東京農工大学科学博物館の「蚕織錦絵コレクション」と和歌山県立文書館のデジタルアーカイブと新規連携しております。

連携状況につきましては、連携調整中のデータベース一覧を机上配付しております。別添②になります。これまで有志会合等で御紹介しておりました資料になりますので、こちらも御紹介しておきます。

別添②の1ページ目は、今、まさに投入準備中のものの一覧になっております。

2ページ目から3ページ目にかけては、連携候補として既に実務者検討委員会でも確認済みで、調整を開始しているものと、していないものと、様々な状況のものになっております。優先順位を上げるべきだというような御意見がありましたら、お寄せいただければと思っております。

4ページ目から5ページ目は、連携候補に挙げただけけれども、まだそんなに優先順

位を上げるレベルではないということで、連携候補のまま、調整を開始する段階ではないものです。こちらにつきましても、優先度等を上げてやるべきといった御意見がありましたら、お寄せいただければと思います。

最後の6ページ目のところが、前回の実務者検討委員会以降の新規連携候補の一覧となっております。こちらにつきましても御確認の上、御意見ありましたら、お寄せいただければと思っております。

以上です。

○高野座長 どうもありがとうございました。

では、ただいまの説明について、質問、御意見等ございましたらお願いいたします。

○渡邊構成員 実践の報告の例として、4ページ目の一番上で御紹介いただいた、初等中等教育でのキュレーション授業でジャパンサーチのワークスペースを活用というのは、うちの学生の大井さんがやっています、昨日、ちょうど報告を受けたところなので、ちょっと補足しようと思います。

データを分析しているところで、今のところ言えそうなのが、知識技能と主体性が今回のキュレーションを用いた授業を通して伸びたのではないかという結果が得られています。ただ、ワークスペース機能については、向上は認められるのですけれども、先ほどお話しした点に比べると、伸びが微妙だったという結果になりそうです。

現在、大井さんは修士論文をこのテーマに沿って執筆中です。最終的にきちんとまとまった形になりましたら、WGの皆様と共有したり、あるいはお許しいただけるようでしたら、大井さんに短時間のプレゼンテーションをしてもらって、実際にどういう効果があったのかという説明をする機会をいただければと思っています。

以上です。

○高野座長 どうもありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

途中で4ページの下で提案のあった、まだ連携していない機関でも、プロジェクトを試してみたい。自分たちが持っているものを、いきなり公開はちょっと無理なのだけれども、トライアルで登録して、それをプロジェクトの中で使ってみて、これはいいから、ぜひ正式に連携して入れていきましょうというステップを踏んでいくような話になるかと思いません。こういうものもトライできたならと御提案いただいていますし、私も大変いいことだと思いますが、その辺りもいかがでしょうか。

(異議なし)

○高野座長 では、このような形で進めるということにさせていただきます。

あと、アンケート調査を予定しているということですが、内容を少し事前に共有できますか。

○徳原室長 はい。URLがございますので、事務局から送っていただいてもよろしいですか。

○事務局（高津参事官補佐） 分かりました。では、本日、皆さんに共有させていただきます。

○徳原室長 基本的には質問内容はほぼ確定と思っておりましたが、もし何か皆様から御意見いただけるようであれば、少し待ちまして、修正させていただきます。

○高野座長 ジャパンサーチは、数年で終わるようなプロジェクトではなくて、継続的に進めていくと思いますので、こういうアンケートでも基本項目については共通した形ですと取って行って、変化を見ることに使えればと考えております。NHKがやっておられる世論調査アンケートみたいな形ですね。そういう意味で、ジャパンサーチについてのアンケートだけではなくて、デジタルアーカイブ全般についての一般的なアンケート項目なども入れるという工夫があってもいいですね。自分たちは、たとえば、教育の実践についてデジタルアーカイブのお世話になったことがありますかみたいな設問があってもいいかなと、ちょっと感じました。

ほかに御意見等ございますでしょうか。よろしいですか。また、戻って議論することもできますので、そのときはおっしゃっていただければと思います。

(3) 産学官フォーラム（第4回）について

それでは、議題（3）、先月行った「産学官フォーラムについて」ということで、これは事務局からお願いします。

○事務局（高津参事官補佐） それでは、資料3を御覧ください。

実施概要につきましては、資料3に記載のとおりでございます。9月10日に国立国会図書館の新館講堂からライブ配信という形で、初めてのオンライン開催となりました。

テーマ、プログラムにつきましては、事前に御案内させていただいたとおりでございます。

このときの資料につきましては、URLを記載してございますが、官邸のサイトの産学官フォーラムのページで公表しておりますし、また、当日の動画につきましても、You Tubeのジャパンサーチ公式チャンネルのほうで公開してございます。

参加の状況でございますけれども、オンラインの効果もありまして、参加の事前登録者数が765名、実際の傍聴参加者が618名でございました。リアル開催しました一昨年、第2回が164名でございましたので、3.7倍ほどの参加がありまして、参加者の地域属性も、国内各地、それから海外からも約4%の参加がございました。

あとは、資料3 別添①のアンケート集計をご覧ください。参加618名のうち、約50%、312名から回答がございまして、めくっていただいた1ページ目、左側に、参加者の職業属性がございまして、アーカイブ機関、大学関係者が大半を占めておりますけれども、民間企業ですとか、その他が12%と、意外に多くて、両方合わせると4分の1ほどおりますので、広がりを感じることができるのかなと思っております。

それから、右側の居住属性ですが、先ほどお話ししたとおり、関東が非常に多いのですが、国内は北海道から沖縄まで、全国から参加が確認できております。それから、海外からも日本研究者など、4%ほどの参加がございまして、あと、最後のほうにコメント

をまとめてありますけれども、ドイツからの参加も確認ができております。

それから、2ページ目、認知手段につきましては、関係者の参加が多いので、当然、業務上での認知、それから関連機関からの情報提供というのが多い傾向にございました。

一方、参加目的を見ますと、ジャパンサーチがテーマでございましたので、もちろんジャパンサーチを知りたいが半分ですけれども、それと同じぐらい、デジタルアーカイブについて知りたいという声があった結果が出ております。専門家から初心者まで、リアル開催のときより属性の幅が広がったのではないかなと見ております。

それから、3ページ目、満足度、理解度についてですけれども、両方とも9割を超えておりましたので、参加者にとっては非常に有意義なイベントになったものと理解しております。

それから、5ページ目以降は、感想と、今後取り上げてほしいテーマなどについて自由記載として、一応、皆様には全文で共有したほうがいいかなということで、机上配布にしてございます。

先ほどの参加者属性の幅で言いますと、例えば6ページ目の30番、8ページ目の56番、9ページ目の82番の後半のところにも記載があるのですけれども、ビギナーも一定程度参加しているように見受けられます。オンラインで参加しやすくなったことの効果とは思いますが、ビギナー向けの内容も一定程度は今後入れていくことも検討したいと考えております。

そのほかにも、専門的過ぎるとか、逆に詳しく聞きたかったとか、学に寄り過ぎなので産の事例を聞きたいとか、いろいろな視点での御意見をいただいております。一度に全てをかなえることは、なかなか困難ではございますけれども、次回以降の開催に活かしていきたいと思っております。

以上ですが、国立国会図書館から何か補足ございますでしょうか。

○徳原室長 事務局から参加者属性でわかる情報を追加いただきたいと思いますと言われておりましたので、簡単にご紹介します。居住地域に関しまして、海外のうち一番多かったのはアメリカかなと思っています。あと、先ほどもありましたとおり、ドイツ、オーストラリア、フランス、オーストリア、ノルウェー、スイスといった国からのアクセスもあったことが確認できています。

あと、パネルディスカッションでは、パネリストで登壇された一部の方には実際に当館の東京本館に集合していただき、残りのパネリストの方はオンラインで参加していただくといった形で、リアルな場とバーチャルな場との組合せにチャレンジしたイベントだったわけですけれども、今後も同じような手法はありだなと思いました。

以上です。

○高野座長 ありがとうございます。

ただいまの御説明について、質問、御意見等ございましたらお願いします。オンラインの方も割り込んでいただいて。

○渡邊構成員 オンラインのパネルディスカッションというのを、僕の所属先で今年は何

度かやりまして、経験値として分かったことですが、先ほどの参加者の方のフィードバックにもあったのですけれども、パネリストが多過ぎるとまとまらなくなるというのがあるように思います。対面の場だと、合の手を入れたり、表情で呼吸を加えたりということをやれるのですけれども、オンラインで視聴している人にとってはその雰囲気伝わらないので、それぞれ個別に話しているようにしか見えないわけです。

なので、今後、この趣旨のイベントを開催していくときは、パネリストの数はなるべく絞って、聞いている人が全体の流れを追いやすいように組み立てたほうがいいかと思うのです。対面で話している人同士では共有している雰囲気みたいなものが、画面越しだと伝わってこないの、聞いている人もフラストレーションがたまるかもしれないです。ぎりぎり鼎談ぐらいまではありかなという感覚を、今うちのメンバーでは話しているところです。

○高野座長 どうもありがとうございます。

ほかにどうでしょうか。はい。

○杉本構成員 杉本です。

さっきの1つ前のこともよろしいですか。いわゆるユーザーサイドの話というのは結構詳しく御説明いただいたのですけれども、データの伸びといいますか、今どれぐらいの量になっていて、それでこれから入ってくるものがどういう伸びになっていくのか。

それと、だんだん領域が広がっていくと、実際のインタフェースの作り方とか、難しいことが出てくるだろうなということも想像できるのですけれども、例えば、この表でいただいたタイプというのがあるのですけれども、これはかなり苦労されているだろうと思うのです。そうした量的な話と、少し定性的な話ですけれども、もし今、この時点でお考えがあれば教えていただけないでしょうか。

○高野座長 お願いします。

○徳原室長 量的なところとして、データベースは112データベースで、メタデータ自体の件数は2130万件と、スライド8ページ目の一番上に書いてあるとおりではあるのですが、メタデータの件数自体は、たしか試験版公開時が1700万件ぐらいでしたので、そこからの伸びというところで行くと、400万件ぐらい増えています。

おっしゃるとおり、カテゴリーのところは非常に苦労している部分ではあるのですけれども、このカテゴリーだけじゃなくて、サブカテゴリーといったものも登録できるようにしています。ただこれらは、データベース単位での登録になっており、コンテンツ単位でより細かい分類のほうがより精緻な検索ができるのに、といった御指摘はいただいています。

ですので、その点につきましては、ジャパンサーチ利活用スキーマに変換するときに、もしメタデータの中にもう一段細かい分類情報を持っていれば、それをを用いてコンテンツごとに分類し、APIで使えるようにできるということで、利活用データを開発しているチームの方で、（ゼノン・リミテッド・パートナーズ代表の）神崎先生が特に御活躍されているのですけれども、整理していることがあります。

ただし、その課題として、そういったカテゴリーのさらに下位レベルのタイプというか、種別に当たる分類に関する情報をメタデータとして持っているデータベースは少なく、メタデータの充実という意味では、おっしゃるとおり、これまでサムネイルURLは登録してくださいということは進めてきたのですけれども、今後は、利活用といったことを考えていくときに、主題のような情報、個別のコンテンツが持っているタイプみたいな情報もぜひ登録していただくと、より一層データの充実が図れるかなというのは、連携窓口として感じていることでございます。

○杉本構成員 すみません、ちょっと確認ですけれども、令和2年度というか、これから入ってくるものの量的なことをお伺いしたいと思います。十分理解できていなかったのですけれども、ここにあるリストのものがもし全部入ってきたとすると、どれぐらいの割合でデータ量が伸びるのかとか、そういった話です。数字的にはたくさんになるほうが楽しいですし、逆にたくさんになるほうが大変でしょうし。

○徳原室長 それぞれのデータベースは、本当に大小様々でありますし、必ずしもメタデータ件数の数字が増えることだけがいいことではないのかなと思っておりまして、より中身が充実できるようなメタデータをもつものとの連携が、増えていくといいなと思っております。

○高野座長 恐らくジャパンサーチWGの大きな話題になるのかなと考えています。さらに多くの人の知恵を入れながら、その辺の作戦を立てていきます。やりやすいものだけやって、偏ったものになったりすると、何のためのジャパンサーチだったのかということになりかねないので、その辺は慎重に進められればと思います。

オンラインのほうで、山崎さんからチャットに質問が入っているので、オンラインでお話しいただけますか。

○山崎構成員 紹介ですけれども、開設準備中のところがとても多くて、簡単に紹介を自らしにくいのかなと思うのですけれども、結構大きいのはたくさん出ているので、その窓口を明確にしたほうがいいかなと思いました。

それから、セミナーの件では、おっしゃったように、少人数で話すような場面が作ればいい。Zoomだとブレイクアウトルームという機能がありますね。ああいう機能で、ワークショップ的にちょっとの時間だけでも五、六人で語り合っ、それをまたまとめるということがあれば、より参加意欲が高まるのかなと思います。

杉本先生もおっしゃっていたのですけれども、準備中のそれぞれの機関がジャパンサーチにリンクさせるために、具体的に何が必要なのかというのが余り理解されていない。過去の経験も含めて難儀するのではないかという印象が、大きな都道府県にはあるのですね。その辺りを別途案内するようなチラシなり、要項なりを、都道府県レベルの情報機関のところに流してあげたほうがいいのではないのでしょうか。水面下で急速に進んでいます。私、あちこちに行かなければいけなくなって、需要が高いというのか、今のコロナ時代の問題もあるかもしれませんけれども、こちらにとってはすごくチャンスかなと。加えて、小さいところもたくさん作り始めています。そこには全く情報が届いていないというのがある。

以上です。

○高野座長 重要なポイント、ありがとうございました。今、こういう状況になったので急に進んでいるというものに対して、受け皿になるような意識や、そこで不足しているコネクシオンの提供などが重要ですね。これまでずっと携わってきた方は多分知っていると思うのですが、急な状況に応じてやり始めた人たちも、またうまくすくい上げられるような方策を考えていければと思います。

ほかにはいかがでしょうか。よろしいですか。

(4) ワーキンググループの進め方について

少し時間も押していますので、それでは、今日のメインテーマ、(4)「ワーキンググループの進め方」に移らせていただきます。

最初に事務局から御説明をお願いします。

○事務局(高津参事官補佐) そうしましたら、資料4「デジタルアーカイブに関するワーキンググループの進め方について(案)」を御覧いただきたいと思います。

まず、1ページ目ですけれども、「1. 現状」でございます。これは、8月に公表いたしました3か年総括報告書に記載されておりますように、実務者検討委員会で3か年議論されました課題と進捗になります。

(1) デジタルコンテンツの拡充という課題になりますが、こちらは各機関のデジタル化の取組を支援するために、先進的な取組事例を収集しております、ジャパンサーチや産学官フォーラムを通じて共有・啓蒙を実施しつつ、技術的あるいは財政的な課題の一つでありました長期保存につきまして、「デジタルアーカイブのための長期保存ガイドライン(2020年版)」として取りまとめて8月に公表したところでございます。

また、権利関係につきましては、柔軟な権利制限規定の整備などによりまして、著作権法上の課題の対応は適切に行われているものと考えておりますけれども、パブリシティ権、それから資料に含まれる名簿などの取扱いをはじめとする個人情報保護法制、これらの対応は中長期的な課題とされております。

(2) デジタル情報資源のオープン化及び利活用のための基盤整備についてですけれども、こちらは著作権などに配慮しつつも、広く認知されることでコンテンツそのものの価値が向上するという観点で、「デジタルアーカイブにおける望ましい二次利用条件表示の在り方について(2019年版)」をガイドラインに取りまとめておりまして、このガイドラインの普及によりましてオープン化を推進することと記載されてございます。

(3) デジタルアーカイブ構築及び連携を推進する仕組みづくりにつきましては、デジタル化に取り組んでおりますアーカイブ機関の評価が、来館者数などの指標に偏らず、デジタルアーカイブ化の活動を評価する新たな指標が必要と考え、デジタルアーカイブアセスメントツールという評価シートを作成して公表してございます。

そのほか、連携の仕組みとして有効と考えられますインセンティブにつきましては、今

後の検討課題とされてございます。

それから、(4) 分野横断型統合ポータルサイトの構築につきましては、平成31年2月にジャパンサーチの試験版を公開しまして、正式版につきましては、先ほど御報告のとおり、今年の8月に公開したところでございます。今後も継続してメタデータの提供を推進していくことと記載されてございます。

(5) のつなぎ役の支援につきましては、つなぎ役の具体的な役割がイメージしにくくて、またメリットもなかなか見出しにくいという中で、連携機関は増加しているという共通認識の基に、つなぎ役の役割を明確化し、どのような支援を行うべきかについて専門的な議論が必要と記載されてございます。

(6) アーカイブ機関の人材教育支援につきましては、幅広い知識や理解を要する人材育成には、育成環境、財政基盤などの課題があるという認識の基で、継続して検討することとされております。

以上を踏まえまして、それぞれのWGの検討課題と論点を2ページ目と3ページ目にまとめてございます。

2ページ目、全体戦略WGの検討課題案になります。

まず、①としましては、デジタルアーカイブ社会の実現に向けた今後の取組になります。3か年総括報告書にも記載がありますように、目指すべきデジタルアーカイブ社会の実現に向けまして、近年の大きな社会情勢の変化に対応するデジタルアーカイブ推進の課題を抽出するとともに、検討する優先順位も含めまして整理することが必要と考えております。

②としましては、利活用促進のための具体策について、になります。活用の好事例をいかに収集して、いかに共有するかが利活用促進には重要でございまして、その具体的な方法を検討することや、あるいは産学官の連携のための論点整理などを想定してございます。

③は、法的課題への対応でございすけれども、肖像権、パブリシティ権、個人情報保護法制などに関わる課題への対応が残っているものと承知しておりまして、これらは非常に難しい問題ではございますが、例えば民間の取組との連携、あるいはアセスメントツールを活用した各機関の対応状況を水平展開するなど、何かしら検討する必要があるものと考えてございます。

④としましては、アーカイブ機関の人材教育支援策でございすけれども、一朝一夕に達成するにはなかなか難しい側面もございすので、まずは現状の把握をした上で具体的な対策を検討することが必要ではないかと考えてございます。

⑤その他としましては、文化学術資源タイプ以外のデータになりますけれども、スポーツとか気象観測データなどが検討委員会でもお話が出ていたと思っておりますけれども、これらのデジタルアーカイブの扱いをどうするか。それから、ジャパンサーチとの連携をどう整理するかについて検討が必要と認識してございます。

3ページ目、ジャパンサーチWGの検討課題案になります。

①としましては、ジャパンサーチのプラットフォーム化について、でございます。単なるポータルサイトにとどまることなく、日本社会のデジタルトランスフォーメーションを

推進するための基盤を支えるプラットフォームとなるべきで、その意義やそのための具体的な内容、サービスなどを検討する必要があるのではないかと考えております。

②として、連携先の拡充になります。連携を拡大するための明確な方針、それからマイルストーンや工程表の検討、併せて優先的に連携する分野や領域を特定することを想定しております。

③としましては、つなぎ役の役割と創出・支援策になります。従来から御認識のとおり、役割の明確化、具体的な支援策についての検討を想定しております。

④として、コミュニティの育成／サポーター制度の課題になります。利用者コミュニティの具体的な育成方法、サポーター制度の設計・運用あるいはインセンティブなどについての検討を想定しております。

⑤としましては、ジャパンサーチ利活用事例の創出と情報共有になります。活用好事例の具体的な創出方法、連携機関との協力方法。それから、イベントやSNS、動画サイト以外の効果的な情報共有の手段などについて検討を想定しております。

⑥としましては、運営体制になります。持続可能な運営体制の在り方と、具体的にそれを構築するための方法の検討などが想定されます。

両WGの検討課題と論点案は、以上になります。

次に、4ページ目、当WGのアウトプットについての案を御説明申し上げます。

まず、取りまとめでございますけれども、今年度は活動期間が半年になりますので、簡易的な議論のまとめを行いまして、2022年上半期に中間取りまとめ、2023年度上半期に報告書という形で考えてございます。

2つ目としましては、各種ガイドラインの改訂版を公表することが広報活動の一環でもあると考えておまして、今、対象と想定しているガイドラインは、「デジタルアーカイブの構築・共有・活用ガイドライン」、「デジタルアーカイブにおける望ましい二次利用条件表示の在り方について（2019年版）」、「デジタルアーカイブのための長期保存ガイドライン（2020年版）」の3つを想定しております。改訂時期の案は記載のとおりでございますけれども、特に実務者協議会時代のガイドラインを改訂することの是非も含めて、後ほど御意見をいただきたいと思っております。

3つ目としては、アセスメントツールの解説書の作成を想定しております。アセスメントツールを多くの機関に使ってもらえるように、取扱説明書が必要ではないかと考えておまして、併せて、このアセスメントツールを利用してもらうための方策も議論できればと考えております。

4つ目は、普及・広報活動として、ガイドラインや解説書を各種イベントで定期的に紹介していくこと。それから、イベントの様子をYouTube公式チャンネルで公開していくことなどを想定しております。それから、チュートリアル動画、ガイドライン解説動画みたいなものの作成を検討してもよいのではないかと考えております。

次に、WGの開催スケジュール（案）、5ページ目になります。上段が今年度、中段が2021年度、下段が2022年度になります。

今年度は、本日が1回目の合同会合ということで、年度内にそれぞれ2回目の会合を予定してございます。

2021年度につきましては、オリンピック期間はちょっと避けてWGを開催し、実務者検討委員会で取りまとめ、推進委員会に報告という流れを想定しております。イベントにつきましては、上半期に国立国会図書館主導でのジャパンサーチのイベント、下半期には当方主導で産学官フォーラムの5回目を開催したいと考えております。そして、下半期からWGをまた開催しまして、2022年度の初めに実務者検討委員会で中間取りまとめをしまして、推進委員会に報告という流れを考えてございます。

2022年度のイベントにつきましては、ジャパンサーチ2周年の頃に今年のような、国立国会図書館と当方合同で、少し規模が大きめのイベントを実施できればと考えております。

最後、6ページ目、5ポツになりますけれども、今のスケジュールに沿った検討スケジュールのイメージになります。各WGを交互に開催していきまして、全体戦略につきましては当方主導で、JPSのWGにつきましては国立国会図書館の主導で運営することを想定してございます。

各回の検討テーマは、記載のとおり、先ほどの案に基づいてはめ込んでございますが、議論の順番ですとか時期、それから、このテーマが足りないとか、これは要らないとか、この辺の御意見、御議論をいただければと思います。

進め方の案については、以上になります。

○高野座長 どうもありがとうございました。

それでは、御質問、御意見をいただくのですが、一遍に多くの項目でいただくと議論がぼやけてしまうので、前半と後半に分けたいと思います。最初は、そもそもWGの運営、とりあえず2つを考えているのですけれども、それはこれでスタートしてよいだろうかという話と、それから、それぞれが想定している検討課題に過不足がないか。こういうものが漏れているのではないかとか、これは余り議論してもしょうがないのではないかとこの御意見がございましたら、まずお願いいたします。

○杉本構成員 杉本です。

全体としては、うまくリストアップされているなという印象を持ちました。その一方、どうしてもカバーする領域が非常に広いので、高度に学術的な領域から、いわゆる地域で作っているデジタルアーカイブまでカバーしないといけないわけですね。そうすると、例えば地域の場合に非常に小さな組織でどうやっていこうかという課題を抱えておられる。その一方で、大きな国の機関で作っている。だから、それが同じ場で議論したときにうまくいくだろうかというのが少し気になるところです。ですから、環境要件というのも含めて問題の整理をされていかないといけないのではないかとこののが、全体としての印象です。

以上です。

○高野座長 どうもありがとうございました。

WGの中でさらに何々問題を中心に見る人たちのチームとかを作って深めていくようなこ

とが必要かもしれません。

○杉本構成員 議論されるときに、フォーカスを今日はこれにしましょうという感じでやっていたら、いろいろな方からの知恵が入ってくると、それはいいことだと思います。

○後藤構成員 人間文化研究機構の後藤です。

まず、簡単な事実確認が1つと、内容について1つ、御質問したいと思います。

1つ目は、このWGに誰が張り付くみたいな感じで、この後分けていくわけではないのですね。

○高野座長 基本的に全員が参加可能、全員が委員である。ただし、参加は余り強制しない。いままでも強制はしていないのですけれども、そんなに強く奨励しないということです。

○後藤構成員 分かりました。それによって、位置づけというか、議論の仕方みたいなことが大分変わると思ったので、これが全体で共有しておきたいということが1つ。

もう一つのほうは、これは中身になるのですけれども、全体戦略WGに長期保存の話が入っていないのではないかと思いますので、これをどこかで。WGのアウトプットのところでは、長期保存ガイドラインの改訂がありますので、恐らく全体戦略のほうになるかと思えますけれども、それは入っていたほうがいいのではないかと思います。

以上です。

○高野座長 多分、書き忘れのような気がします。どうもありがとうございました。

○渡邊構成員 渡邊です。

さっき2つ議題があると言われて、2つのWGでいいのかという話と内容の話で、でも、混在していてもよさそうなので、内容についての点を1つ。

○高野座長 今、お願いしているのは、1つ目が2つの話題という意味です。すみません。ワーキング全体と課題漏れです。

○渡邊構成員 ジャパンサーチ利活用事例の創出というのが無理芸な気がしていて。先ほど紹介した中で、渡邊研の院生さんが創出しているのですけれども、WGのメンバーが創出することはできないと思うのです。なので、利活用事例を生み出すためにどういう戦略を取ればいいのかという言い方をしないと、いつまでたっても広がっていかないように思います。これはことだまの問題だと思うのですけれども、創出すると書いてしまうと、僕らがない頭を絞って創出しなければいけなくなってしまう。

そうじゃなくて、いろいろな意欲がある人たちにジャパンサーチを利活用してもらって、どんどん生み出していくためにどんな戦略があり得るかということを議論しなければいけないと思って、ここの文言をそうしたニュアンスのものに変えられればなと思いました。

○高野座長 当然、創出や情報共有をするために、我々は何をしなければいけないかを議論するということです。ですから、我々が部分的に担うかもしれないけれども、外の利用者も含めて、全体としてこれを実現するためにどうしなければいけないというのが課題だと思います。渡邊さんのニュアンスは非常によく分かりました。

○山崎構成員 杉本先生のお話を聞いていて、同じ意見ですけれども、地方の場合と大学

とかの知識量の差というのは膨大にあるなと感じます。これは、同じような議論をしてもちぐはぐ。私が地方に行ってサポートしていることが多いので、何が彼らの課題になっているか、どう伝えるかというのは、先ほども少しお話ししましたけれども、別途考えたほうがいいのかと思いますね。国の機関は加入が進んでいくと思うのですけれども、地方のほうのローカルのデータは大切なことなので、そこに入っていただくための窓口的なものをどうするか、あるいは情報をどうするかみたいなものはとても大事なことで、そこを一定のところで議論したほうがいいのかと思います。

○高野座長 これは、どちらかのWGに無理に押し込むとすると、どちらが適切だと思われますか。ジャパンサーチという具体的なサービスにどう参画してもらうかという具体例としてアプローチするのがいいのか、それとも地域のもを盛り上げるために、国の戦略としてどういうことをしていくべきだという全体戦略WGの議論がいいのか、どちらのほうに心に届くでしょうか。

○山崎構成員 1つは、ジャパンサーチWGの中のつなぎ役か、あるいは②の連携先の拡充の部分かなと思います。それから、全体戦略WGであれば、4番とかは割と近いですね。人材がないということが原因になっているわけですから、その辺でもう少し議論してもいいのかなと。

○高野座長 分かりました。では、両WGにおいて、その地域という目線を忘れずにきちんと手当てをしていくということですね。

○大向構成員 大向です。

4 ページのところでもアウトプットが最初に列挙されていて、すごいなと思いつつ、一方で、2つのWGでどう担当するかというところが難しいなと思います。今はドキュメントの種類が列挙されているという感じですがけれども、実際にはWGで本当に議論していくときには、誰に向けてのアウトプットなのかというところがはっきりしているといいのかなと。例えば、一般のユーザー向けに伝えたいこと、ジャパンサーチと既に連携している機関、連携したいと思っている機関。それと、ジャパンサーチとは関係なく、デジタルアーカイブをやる人をお願いしたいことというふうに、宛先を考えながら議論できると少し見通しがよくなるかなと考えました。

以上です。

○高野座長 多分、これも事務局案取りまとめのタイミングでは、手元にドキュメントストラクチャーというのがこれしかなかったのが、これを拡充、アップデートしていきましようという話になっているのですけれども、当然そうですね。大向さんが言うように、WGの議論が深まって、より適切なドキュメントの単位とかアプローチとかを考え直す時期ではあると思います。今、考え直さないと変えるタイミングがないので。

○大向構成員 1つだけ追加で。このように考えていくと、必ずしも成果はドキュメントでないかもしれないと思います。例えば、国立国会図書館さんをお願いしなければいけないことは、要求仕様という形でお渡ししなければいけないでしょうし。ドキュメントを作るのは大変な手間だと思いますので、その調整ができるといいのではないかと思います。

た。

すみません、以上です。

○高野座長 どうもありがとうございました。

○杉本構成員 中の項目に話が入っていきつつあるかなと思うので、(6)アーカイブ機関の人材教育支援というのがあるのですけれども、これは危惧ですけれども、こういうところでの議論というのは、どうしても作るほうの人材であったり、あるいは法律関係のことに関して知っている人材ということは、よく行われる議論だろうと思うのです。

ただ、実際のところは、使い道によっていろいろニーズが変わってくることもあり、例えば観光振興のためにどう使ったらいいのだろうかとか、あるいは教育振興のためにどうやって使ったらいいのだろうかということは、人材としては性質がちょっと変わってくるだろうと思うのです。ですから、ここでの議論のときに作るところが一番ですと決めてしまわずに、そこをいろいろな観点があるということを入れておいていただきたいと思えます。

それは、(6)のところの人材育成があるのですけれども、ほかのところと関連する話だと思うのです。ですから、ほかのところ、例えばコミュニティの話もありますけれども、例えばつなぎ役というのものもある種のコミュニティだと思いますし、コミュニティがないと人材育成できないということもありますし、そうしたつながりを意識して進めていただきたいと思えます。

○高野座長 ほかにいかがでしょうか。

○北本構成員 全体戦略のほうは、今の委員会の比較的継続ということで、余り違和感はないですけれども、ジャパンサーチWGのほうがどういう位置づけか、明確にしたほうがいいと思うのですね。昔も質問したと思うのですけれども、ジャパンサーチの日々のオペレーションに対して、このWGというのがどういう立場なのかというところがちょっとよく分からないところです。

例えば、具体的なプロダクトなので、運用に入ったから決めなければいけないことが増えるというところは実感があるので、こういうWGを作ることはいいと思うのですけれども、そういうオペレーションを行っているチームに対して、ここにある種の経営者的に指示を行うところなのか、それとも、ある種社外取締役とか外部評価委員会のように評価を与えるのか。そういうガバナンスと構造というか、その辺がよく分からないので、これが行うことはどういうことなのかというところをちょっと明確にしたいなと思いました。

以上です。

○高野座長 多分、そこはあえてグレーにしているのだと思います。国立国会図書館の中でやれることと、それから国立国会図書館の中ではなかなかやりにくいこと、外からの要請なり、国全体を見た要望という形で受けることによって、国立国会図書館のチーム自身も動きやすいとか、そうやって助け合いながらというのでしょうか。実質、社外取締役に近いのかもしれないというのが僕のイメージですけれども、国立国会図書館さんは何か答えられますか。

○徳原室長 ジャパンサーチWGは、方針を決めていただく場だと思っております。国立国会図書館単独の事業ではありませんし、皆様の事業だと思っておりますので、全体でどう進めていくべきかといった、それこそ将来計画に関して、こういう方針で、5年後にはこうなっているべきみたいなことを御議論いただいた上で、その方針を実現するためにどういう手段があるのかというのは、国立国会図書館で検討してお示ししていくといった関係性だとイメージしておりました。

○高野座長 では、社外じゃないですね。

○北本構成員 多分、実質的にもう少し内部から何か方針を決めていく取締役みたいな感じなのですかね。

○高野座長 ジャパンサーチはこの9月までの3年間、ここでの議論、提案を含めて、国立国会図書館の努力によって実際にサービスインしたわけですね。これをこの国に長く位置づけて運営していくのに、どういう体制が一番望ましいのかとか、そういう議論はとりあえず抜きにして、議論の成果を動くサービスとして見せようじゃないかということが、前の3年間の成果だと思うのです。その成果をどう位置づけて永続性を持たせていくのかというのが、多分このジャパンサーチスペシフィックなWGのミッションかなと。

この委員会から外していくということも、1つの可能性としては、このWGの結論として出てくるかもしれないし、どこかに第3の組織を作って任せてしまうというアクロバティックなソリューションも出てくるかもしれないということでしょうか。というので、このぐらい、一番基本に立ち戻った議論ができるといいなと思います。

ただ、WGで分ける理由は、全体のデジタルアーカイブを国としてどうしていくのかという議論に比べると、非常に具体的で、必ずしも全メンバーが興味を持たないかもしれない話題なので、全員に参加を求めるのは、ちょっと心苦しいということもあって、WGを分けて、興味がある人、意見のある人、何か文句を言いたい人に集まってもらって議論を深めていくという場所を用意するということです。

○北本構成員 ありがとうございます。

○高野座長 ほかにいかがでしょうか。

○生貝構成員 ありがとうございます。

重要なことは、ほかの方々からかなりおっしゃっていただいていると思いますので、今まで触れられていなかった箇所、1つは、全体戦略の③の法的課題への対応というところについて。ここに挙げられていることも重要かと思うのですけれども、拝読した限りだと、改訂が予定されている二次利用条件表示ガイドラインをどこでやるのかということが、明確に書いていないかなと思いますので、ここに書いていただいてもいいのかなということ。

それから、二次利用条件については、Rights Statementsの日本語化というところをこれからさらにどうしていくかでありますとか、まさに様々な状況の変化で、この二次利用条件の整理というの、全体としても、ジャパンサーチとの関係でも常によく考えていく必要はあろう。明確に入れていただくとしたら、法的課題のところだろうなということ。

それから、いろいろな意味での権利処理でありますとか、現行法で裁定制度でありますとか、47条1項、3項も含めてですけれども、ジャパンサーチを含めた全体の中でどうやっていくのかというところ。また、もしかすると、最終ページにも書いていただいたとおり、法律自体も集中的に、継続的に動きがあるところだと思いますので、著作権とか権利処理という言葉でもいいかもしれませんが、言及がないのは逆にちょっと不自然かなという気もしたところではあります。このことが1点目であります。

それから、もう一つは、②の利活用促進のための具体施策というところで、出たかもしれないのですけれども、2つ目の産学官連携というところに関して、ざっくりとですけれども、いろいろな意味での産業界、企業さんとの連携や意見交換やニーズ調整をどうしていくかというのは、力を入れていけるといいのかなと。全体の会合のときにも少し申し上げたのですけれども、どうしてもノンプロフィットセクター中心の動きで、それはそれで望ましいものである。

例えば、関係する企業というのも、本当にメディア企業様、あるいはそういったものを持っているところから、もしかするとベンダーさんのようなところもあるかもしれないし、あるいはIT企業、ないしは先ほどちょっと言及があったとおり、大半はSNSから流入してくるのであれば、SNS企業と話しするというのもあるかもしれない。あとは、最近、「どうぶつの森」でデジタルアーカイブの活用がかなり積極的にやられている。あれをデジタルアーカイブと言っているのか分からないのですけれども、されている。

いろいろな新しいインタラクティブなツールの中での活用は、どっちかというプロフィットセクターにどのぐらい頑張っていたかというのが、フォープロフィットでどう頑張っていたかというのが大きいと思うので、そこを全体的なトーンとしてよく見ていけるとよいのかなと。多分、全体戦略ですか、感じたところです。

差し当たり以上です。

○高野座長 ほかにいかがでしょうか。

先ほどの国立国会図書館からのジャパンサーチの報告の中でも、問合せの事例として出版とか放送に使いたいというのがありましたが、あれもNC(Non-Commercial)ではなかなかカバーできない範囲ですね。ですから、社会的に動き出すには、そういう商用利用の範疇に入るものを切り捨ててはいけないということで、重要なポイントだと思います。

ほかにいかがでしょうか。

あと、論点として事務局で用意していたのは、課題はいっぱいあるけれども、検討の順番、優先順位はどうしたらいいとか、ヒアリング候補、このテーブルを引き継いだワーキングメンバーではちょっと不足するのではないかな。それをどう広げていくのか。ヒアリングという形で外の情報を入れていくとすると、今の商業利用みたいなものは、多分1つの具体的ないい例ですが、そういう外の人たちの話も聞いたほうがいいと思います。山崎さんがおっしゃっていた、地域の発信をこれからやろうと思っている人たちの生の声を聞くというのも、1つあってもいいかもしれないですね。

○山崎構成員 よろしいですか。ターゲットという意識、何人かから話があったので、環

境ターゲット、受ける側、出す側、様々なターゲットの区分があって、その区分を1回整理してみたらいいのかなと思います。課題はあるわけですが、課題があっても、ターゲットごとに受け止め方は当然違う、視点も違って来るわけですね。だから、全部に必要なかもしれませんが、必要なところをもう少しターゲットをあらかじめ明確にしておいたほうが、WGの作り方が分かりやすくなる。テーマもより深く入りやすいのではないのでしょうか。

ターゲットが曖昧だと、誰のためにこれを行っているのか、さっぱり分からなくなってしまうということも、今までも多少あったので、企業みたいなターゲットもあるでしょうし、地方機関の方、あるいは一般がそれを使うという視点もある。あと、大学ということもあるでしょうね。様々なターゲットがあって、それぞれ違う視点になってしまうかなと思うのです。そこは、ちょっと組み方の工夫が必要かなと思いますけど、それをすれば大分分かりやすくなりますね。ターゲットを明確にしていれば。そう思いました。

○高野座長 先ほど杉本先生からもあったように、今日はこういうターゲットに対して考えていきましようとか、話題ごとに明確にして議論するというのがよいかもかもしれません。

○杉本構成員 杉本です。

この両WG、結構ハイレベルな会議になるかなと思います。そういう意味では、昨年やっていた有志会合というか、ある種ぶっちゃけのブレインストーミングができる場というのは必要じゃないかなと思うのです。そこで、今日は何に関してブレインストーミングしようという感じでやると、有効な場が作れるのではないかなという感じがします。

○高野座長 私もそう感じています。最後のページでしたか、スケジュール表がついていると思います。5ページの開催スケジュールです。多分、今日のような正式の会議として、このWGを運用すると、会議費の面と事務局の手間等を考えると、このぐらいの頻度が限界だというのが事務局側の議論なのです。そうすると、年に多くて3回ぐらいですか。今年度は、WG、あと1回ぐらいで終わりみたいな形なので、議論を深めるどころか、もう一回おさらいして終わりみたいなところしか深まっていかないので、これをどうしていくのかというのを後半の議論として、皆様の御意見を伺えればと考えておりました。

このWGとして2つに分けて、実務者検討委員会の役割を2つに実質分けて議論しようということが今回の提案ですが、その下にWGのアイデアを支える何らかのアクティビティーを作っていないと、資料を誰かが用意したものがずらずらと説明されて、まあいいんじゃないですかというので終わってしまうという話になりかねません。どういう進め方がいいでしょうね。この時代だと、オンラインでプレスト的なもの、半分はリアルでもいいですが、混ぜていくというのがいい吸い上げになるのでしょうか。

○渡邊構成員 渡邊です。

いいかげんSlack疲れしているところではあるのですが、Slackを用意してもいいのではないかという気はします。つまり、議題と言うほどではないけれども、皆さん、呼びかけづらいです。WGだと、先ほど座長が言われたように、議題を消化するだけで時間がたってしまうし、かといって、いきなりオンラインミーティングで集まって、さあ、話そうかと

言っても、最近どうですかで終わるような気がするので、Slackベースでそういう情報交換する場を作ってもいいのではないか。

ただ、僕もSlackに参加しているだけで、ちょっと死にそうではあるので、手軽にシェアできる場が1個欲しい。それも非同期のほうがいい。Zoomとかは一斉に集まらないとできないので、文字情報で時間を隔ててリアルタイム感があるようなやりとりができればいいと思います。

○高野座長 それはいいかもしれないですね。Slackで育ってきたスレッドを拾って、プレストを本当にする必要があれば、それを深める会を後でやってWGに上げていくみたいな形でしょうか。

○細矢構成員 国立科学博物館、細矢です。

私は、どちらかという今時代に適応していない絶滅危惧的な人間なのかもしれないですけども、対面に勝るものはない部分というのはどうしてもあると思うのですね。全部がバーチャル、全部が非同期というのはいかがなものかというところがある。例えば、非同期でこういうふうに議論ができてきたというのをまとめて、どなたか座長さんとか担当者があるときに同期的にバーチャルの会合で紹介してもらって、それに対して、皆さんが短い時間でもいいから参加できる人が意見を述べるとか、そういうハイブリッド的なものを導入するというのはいかがなものでしょうか。

○高野座長 僕が時々参加しているIIIFのテクニカルコミッティーというのがあるのですけれども、そこは話題があってもなくても、マンスリーで必ず開催します。さすがにリアルは無理なので、常にオンラインですけれども、世界中から参加できるような時間帯に、非常に短時間、1時間ぐらいやって、それまでに論点は尽くしておくわけです。最後、その会議に出た人が、A案、B案、C案があったら、どれかに投票して決めるというのをその会の目的にしているのですけれども、そこに参加できなかった人は、会議の後、1週間ぐらいの期間に録画を見直して、投票できるという形で物事を進めています。

そういう非同期と同期でみんなの意思表示、インタラクションを作る場所と、最終的に取りまとめるという知恵が要りそうですね。せっかくこれだけのメンバーが集まっているので、ちょっと試してみるというのがよさそうです。私も日常的には一切Slackとかを使っていないので、始まったら始まったで、大変だなと思いながら聞いていました。

○細矢構成員 今のやつの続きですけれども、先ほど渡邊先生が御指摘されたように、人数が多くなってくると、同期であっても、非同期であっても、かなりまとめにくいところはあると思います。先ほどの産官学フォーラムのレポートにもありましたけれども、演者が多くて参加者が多いと議論をまとめにくいということがあるので、書かれたもので重複するところを排除して、どなたかがまとめるというところに意味があるのではないかと思います。すみません。

○高野座長 論点の事前整理みたいなことに役に立つということですね。

○山崎構成員 方法論は多分いろいろあって、ネットでの議論、オフラインの議論があっ
ていいと思います。私みたいに遠くに離れていると、ウェブ会議、ネットはありがたい。

MessengerとかSlackを使うとありがたいです。ただ、全体をどうするかという話を決めておかないと、勝手にワーキングチームでもいいですけども、そういう認可をいただいて、いろいろなところで勝手にテーマを決めて議論する。議論の中身はここにあるものから選んでいいと思うけれども、そういう形で一定のグループの中で議論したものを、今おっしゃいましたけれども、どなたかがある程度まとめて、この場で情報として提供する。

こういうことがあれば効率的ですね。たくさんの方にここに来ていただいて、お話しをしていただくというのももちろん大事だと思うのですが、限られた時間ですね。ですから、数回しか開けない中で全てを議論するというのは難しいと思います。過去にもそういうことはやってきたかなと思うので、もっとそれをたくさんの中で設けることをどういう形で示せばいいのか、ちょっと分かりませんが、ここにいるメンバーだったら、勝手にWGをやったら、私だったら周りの人間に声をかけて、とりあえず何か議論して、提言として短いペーパーを作って、そちらに提供するという事は可能かなと思います。

以上です。

○高野座長 どうもありがとうございました。

○細矢構成員 よろしいですか。すみません、もう一つ欠けているというか、落ちがちな視点で、議論をするということと、ブレインストーミングするというのは本質的に違うものであるということがあるのではないかと思います。議論するというのは、1つのことに対して賛成である、反対であるということによって物事が進んでいくか、意見を募集していくということによって何かを決めるという意味決定に結びついていくものですが、ブレインストーミングの場合は、どちらかというアイデアを募集するという事で、よく言われるのは、批判厳禁、質より量、自由奔放でしたか、そういう原則に基づいてやっていくものなので、それは多分非同期のほうが向いていると思うのですね。

ただ、議論は同期のほうが向いているように思いますので、今回の話題提供に対して反論するというのは、議論を求めているのか、あるいはアイデア出しを求めているのかというところを明確にすることによって、ツールもうまく使い分けできるのではないかと思います。

○高野座長 オンラインの参加者もうなずいている方が多いです。

○生貝構成員 ありがとうございます。

今の議論というところとの関係で、またちょっとプラスアルファな感じになるのですが、ここのいわゆる取締役会議でしたか、議論をディスカッションを含めてどうしていくのかということと。その場合、社外取締役じゃない。でも、社外取締役、大事だと思うというか。このジャパンサーチなるもののオーナーシップは誰にあるのだろうかというときに、結局は広いと思うのです。特に、少なくともジャパンサーチの中の人、本来的につなぎ役として参加していたり、コンテンツを提供していたりする人、一人一人が多分、中の人だと僕は認識していますし。

それで、ヨーロッパは、よくアグリゲーターフォーラムだと僕自身は思っているのですが、アグリゲーターフォーラムのようなものを、難しいヨーロッパの世界の中で

非常によくやっているのかなと思ったときに、今、お話に出ていたような範囲での議論というところと、まさに本当の意味でのステークホルダーの範囲での議論というものをどうファシリテートしていくのか。それは、まさに今、お話に出ていたいろいろなツールを活用していく方法もあると思いますし、そのことがこの取組がサステナブルである上で一番必要なのかなと感じているところです。

○高野座長 重要なポイントですね。データを出している人たちが、自分たちのサービスだと思えるかというのは非常に重要。そういうのを意識的に作っていきたいと思います。

○杉本構成員 ちょっと外しているかもしれないですが、杉本です。

先ほどブレインストーミングと議論とは違うというお話があったのですが、もう一つ、それぞれの立場というか、ふだん考えていることの違いを理解する場が必要だと思うのです。そういう意味では、何か新しいアイデアを出すためのブレインストーミングもありますけれども、例えば地域のデジタルアーカイブと言ったときに、どんな問題を抱えているのかということ、学術のデジタルアーカイブをやっている人たちが理解する。だから、違いを理解する場というのは何か欲しいと思います。それが非同期でできるのであれば、それはそれでいいですし、とにかくそういう場がどこかに欲しいと思います。

○高野座長 ありがとうございます。

○室屋室長 国立美術館、室屋です。

先ほどの生貝先生の御発言とも関連するのですが、両WGの課題というか、論点整理の中で、連携機関が継続的に情報を提供していくに当たって、多分これからいろいろな問題を抱えていくと思うのです。そういうことを議論する場、夢と理想を語る場というのはすごく重要なので、全体戦略は非常に重要ですが、多分、継続的に関わっていく段になって、それが2年3年続くことによって、戦術レベルでも戦略レベルでも多分いろいろな問題が出てくると思います。なので、ジャパンサーチWGのレベルでも、全体戦略のレベルでも、連携機関の具体的な問題をどう吸い上げていくかという場をぜひ設けていただきたいなど、議論を聞いていて思いました。

以上です。

○高野座長 それをもう一つのワーキングにしてもいいぐらい重要ですね。国の真ん中辺で数人が集まって決めているのだろう。今のだと、そういう認識や実態になっているかもしれません。この会には、できるだけ連携組織の実務者を呼ぶというのを目標にやってはいるものの、当然、全部を尽くすことはできていないので、そういう意識で何かを回すというのは重要ですね。今年、間に合わないにしても、来年度はそういう形を新しいワーキングとして考えていくことも含めて、検討する必要があるかと思います。

○渡邊構成員 渡邊です。

Slackだろうが、Zoomだろうが、形式は適したものを使えばいいと思うのですが、今、言われた、あえて議題を設けないようなミーティングの際に、誰か連れてきていいぐらいまで緩くしてもいいように思います。先ほどの話題とつながると思います。こういう話題で話しましょうというときに、ゲストとして何とかさんを参加させてもいいぐらいの

裁量がWGのメンバーにあると、より広げやすいと思いますが、いかがでしょうか。

○高野座長 WGのメンバーという、いろいろ難しいみたいなので、ヒアリングと我々は呼んでいたのですけれども、外部の方に具体的に来ていただいて、あるいはウェブで参加していただいて意見聴取する、あるいは議論に加わっていただくというのは、ぜひそういう機会を作りたいと思います。

○山崎構成員 私から1ついいでしょうか、関連してですけれども、国の会議に出て何かしゃべるのは、地方機関とかの方は結構重荷といいますか、緊張するので、事例発表まで求めないにしても、何かの課題があれば、それを簡単にちょっと話していただくような場は必要かなと思いますね。渡邊先生の意見に近いかなと思いますけれども、こういう会議に呼ばれて何かしゃべるとなれば、普通の方であれば相当準備しなければいけない。そうになると、思ったことがしゃべれなくなってしまって、本当の声というのですか、私などは直接地方機関に行くと聞くのです。

それを全部こちらで集めてとなると大変なことなので、皆さんにも共有化したいことがありますから、求めるのは気軽なゲストですかね。ここに来てしゃべってくださいという話でないような、それは今までもやってきたと思うのですけれども、そうでないような形があれば、より近い声が聞こえるかなと思います。

○高野座長 多分、頻度から考えても、本当のWGにお呼びしてというのはなかなか難しいと思うので、このWGに何かを提案したり、持ち込む前段階として、そういう問題を共有する人たちの何かの集まりなり、オンラインの意見聴取なりをしていただいて、それをこのWGに委員が提案していただくという形が、無理がなく、今、山崎さんが御心配されているようなことにも陥らずにやれるのかなと感じました。

それでは、今年度はこの2つのWGでとりあえずやってみましょう。実務者検討委員会は来年度になってから1回やるだけということで、その間はこの2つのWGに活動を任せて、今日、御提案がいろいろあったように、さらに裾野の広いアクティビティーをうまく吸い上げてくるような工夫をしながら開催していくことにします。

それで、具体的にどのの方がどう動くかということについては、ちょっとローカルに調整させていただいて、最後、それらがまとまったものとしてWGが開催されていくみたいな、もう一回何をやりましょうかというWGを開くのはトゥーマッチやめて、アクティビティーを作ってから、今年度こういう意見が出てきて、こういうことについては決めてもらいたいという形になったらWGを開くという形を取らせていただこうと思います。

それから、とりあえずWGを誰がまとめるかという話ですけれども、初年度は勝手も分からないし、ここでの議論を分けていくということもありますので、とりあえず両方のWGの座長は僕が暫定的にやらせていただいて、次年度以降、より適切な座長が見つかりましたら、その方に譲ってお任せしていくという戦略を考えたいと思うのですが、それでよろしいでしょうか。

(異議なし)

○高野座長 どうもありがとうございます。

では、またメール等を通じて御相談させていただきます。
「その他」について事務局から連絡事項をお願いします。

(5) その他

○事務局（高津参事官補佐） 本日はいろいろとありがとうございました。

たくさんご意見をいただきましたので、もう一度こちらで整理しまして、また御相談さしあげたいと思います。取り急ぎ、まずWGそれぞれのキックオフといたしますか、両ワーキングを年度内に開催し、今いただいた意見を整理して進めたいと思いますので、準備が整い次第、皆様に御連絡させていただきます。

よろしく願いいたします。

○高野座長 それでは、本日は長時間にわたり熱心な御議論、ありがとうございました。
合同ワーキングをこれで終了いたします。どうもありがとうございました。